

主の公現 マタイ 2 : 13~23

朗読された福音には「占星術の学者たち」とありますが、もう少し詳しく3人について考えます。

参考資料は『賢者の旅 The Wise Kings Journey』 56分 2001年 フランス 女子パウロ会

チェコ・アニメの伝統から生まれた詩情豊かな作品です

まず、ガスパルです。彼は若くて有能な医師でした。大都市アレキサンドリアでペストに苦しむ人々を助けていました。するとお告げを受けます。「星が空に現れる時、男の子が生まれる。男の子は平和の君となり、国は光に溢れ、苦しみは消え去る。恵まれたあなたは星に従いなさい。」ガスパルは、医者仕事を置いて星を追いかけることにします。

賢者メルキオールは、あらゆる本を研究していました。「天文学上の計算を全てやり直したが、全て合致している。星が案内役だ。」と確信します。娘が「どこまで星を追いかけるの？」と聞くと「生まれたばかりの平和の王様に会うまでだよ。」と答えます。船旅の途中、暴風雨に襲われましたが、星の案内を信じて奇跡的に助かります。

大祭司バルタザールはメソポタミアに星が現れたのを発見します。「星は王様の誕生のお告げだ。新しい王だ。世の中に正義をもたらす平和の王様だ。」と確信します。彼が仕える王は「神殿の中で研究をしていれば良いのに。」とバルタザールに親切です。でもバルタザールは「行かねばなりません。星が招くのです。」と決心します。

3人は星に導かれます。「全ての民を救う、生まれたばかりの平和の王を示す星」です。けれども、旅には試練がありました。途中、水のない砂漠でさまよったり、海賊や山賊に狙われたこともあったでしょう。困っている人は放って置かず、予定を変更して介抱したでしょう。でも、星を見失うことはありませんでした。星を追いかける冒険に心を躍らせていました。

星は美しい街、エルサレムへと3人を導きます。彼らは、心から喜びました。しかし、街はローマに支配され、人々は圧政に苦しみ喘いでいました。残忍な独裁者ヘロデ王が人々を苦しめます。すると羊飼いが教えてくれます。「何日か前の夜、星が明るく輝いたんです。そして、天使が現れて、地には平和、喜びなさい、今日救い主がお生まれになったって。」告げました。羊飼いは3人を馬小屋に案内します。「ここです。王様の真上に星が輝いています。」溢れる喜びを胸に小屋に3人は入ります。命がけで守ってきた捧げ物を、幼子と母親に捧げます。

王様へ、香り高い没薬です。(バルタザール)

王様に黄金を捧げます。輝く王様に相応しいかと。(メルキオール)

王様へ、乳香を捧げます。その香りが天まで届きますように。(ガスパル)

3人は深い喜びを胸に小屋を後にします。するとヘロデが幼子を見つける夢を見ます。

「(幼子が) ああいたぞ! 殺してやる!」 不吉な夢にすぐ飛び起きます。

「ああしまった! 王様は?」と羊飼いに尋ねます。すると「夜明けに旅立ちました。幼子はお母さんの腕の中でした。僕見ました。羊の番で起きていたから。」

他の賢者も言います。「ヘロデの夢を見たのだ。彼は危ない! 幼子を殺そうとしていた。我々も危ない、エルサレムも危険だ。そうだ、別の道を通って帰ろう。」

朝日が、街を染める頃、3人は旅立ちました。別のルートで家に帰ります。今回の旅に道案内はいりません。心に星が灯っていたからです。

占星術の学者たちには、恵まれた生活がありました。でも、それを脇に置いて星を探す長旅に出ます。星に人生を賭けました。3人が追いかけた“星”は、私たちにとっては何でしょうか？ 心躍らせるものがあるのでしょうか？ ヘロデのような悪の力が邪魔してないのでしょうか？ 3人の旅と自分の信仰生活を重ね合わせてみましょう。 平和の星を探し続けましょう。